

日本文学研究(古典)

岡田 ひろみ

同じ作品を読みながら見える世界がこんなに違うのかと思うことがある。多門靖容「古代和歌の表現論のプログラム」(『日本語の研究』第14巻2号 2018年1月)は、古代和歌に連体歌、序歌、倒置歌という三つの世界を見、それぞれの課題、関わりを論じたものである。各パターンやタイプ分けをし、係り受け構造や数値分析により論が展開されるが、特に目を引いたのは「浅田予想」という聞き慣れないキーワードであった。浅田予想は多門氏が登壇した、2015年度日本語学会シンポジウムの際の打ち合わせにおける和歌文学研究者の浅田徹のコメント(連体歌の、歌の前半から後半への時空間的飛躍に関して、和歌研究者の立場から述べた予想のこと)であり、多門氏は連体歌について本論で浅田予想を実証している。更に、複数自体描出の表現類型を把握することで、語学研究のみならず、文学研究で取り残された部分があることを喚起する刺激的な論であった。

紙幅が限られているので、以下簡単に2017年～2018年に発表された論文、図書を紹介する。論文は、高木和子「「～顔なり」の表現について—『源氏物語』の例を中心に」(『日本語学』明治書院 36号 2017年1月)、小嶋菜温子「『源氏物語』の表現世界—『うつほ物語』のかなたへ」(『愛知県立大学説林』65号 2017年3月)、辻和良「『栄花物語』、「心情的表現」に基づく主題論的考察」(『古代文学研究第二次』26号 2017年10月)、平田彩菜恵

「『源氏物語』末摘花巻における「色こきはなど見しかども」—和歌的表現の連想性」(『日本文学』66号 2017年10月)、中田幸司「『枕草子』「故殿の御ために」章段の〈対話〉と機能」(『玉川大学文学部紀要』58号 2018年3月)、新見哲彦「作り物語の和歌的表現—中世王朝物語を中心に」(『中世文学』2018年 63号)など多く、『国語と国文学』(2018年5月)が「平安文学研究の現在」と題する特集号であることも記しておく。吉海直人「『源氏物語』の特殊表現」(新典社 2017年2月)は「らうたげ」「さだ過ぐ」「格子」など特殊というよりむしろ身近に感じる表現をとりあげる。それらの語が実は内包する特殊性を指摘することで、古語に対する思い込みを払拭させようとする著書である。和歌に関しては、室田知香「「ふる」と「なる」—恋の時間・結婚の時間—」(『国語国文』第87巻4号 2018年4月)が、『古今集』以後『後撰集』前後の時期の恋歌に見える時間意識がいつ、どのような経緯を経て顕著になったのか、「ふる(古る)」と「なる(馴る)」という語に着目し、藝の恋歌の表現について考察する。特に「なる」を通して平安期の男女関係をめぐる発想が丁寧に辿られており、物語を読む際も参考になる。

最後に書誌学に関する論文であるが、佐々木孝浩「平安時代物語作品の形態について—鎌倉・南北朝期の写本・古筆切を中心として—」(『斯道文庫論集』第52集 2018年1月)をあげる。作品(歴史物語、歌物語、作り物語)毎の装訂から物語のジャンル意識が読み取れることを明らかにしており、本の形が持つ表現性について考えさせられた。(共立女子大学)